

論文の内容の要旨

論文題目 元代詩法叢書の研究——『詩法源流』、『木天禁語』、『詩家一指』を中心に

氏名 おおやま きよ 大山 潔

本論は元代詩法叢書の本来の姿を探り、中国詩論史における位置づけを再検討する試みである。「詩法」とは、句法・篇法など具体的な詩の作法と、詩の理論や歴史に関する議論とを合わせて呼ぶ用語で、元明には「詩法」「詩法源流」など詩法と名乗る書が数多く出版された。「叢書」は現在一般に種々の書物を一つにまとめたものの意で用いられ、四部叢刊、四庫全書などがその例とされる。しかし、唐の陸龜蒙は歌・詩・頌・賦・銘・記・傳・序など様々な文章が、分類や順序にこだわらず収録されている書物を叢書と呼んでいる。¹詩法叢書とは、この意に倣い、同じく詩を論じつつも、作者、主題、體例の様々に異なる文章を一書に収録したものをいう。なお、中国ではこのような書に対し「詩法彙編」という語が用いられている。

元代の詩法及び詩法叢書は中国詩論史上長く忘れられた領域であった。明代には多数の詩法書が刊行され、そのいずれにも范德機『木天禁語』、楊仲弘『詩法家数』、傅與礪『詩法正論』、揭曼碩『詩法正宗』など、元代著名詩人の名を冠した文章が掲載されている。しかし晩明の許学夷はその内容が「穿鑿淺稚」であるとして、これらの文章を著名詩人に仮託した偽作であると主張し²、清代に入るとこの評価はますます不動のものとなった。『四庫全書総目』は、これら元人の作とされる文章を、浅俗で詩学的価値はなく、書肆が営利のために偽託したものと認定した。乾隆35年(1770)、何文煥編『歴代詩話』が三篇を収録したのを最後に、元人の詩法が刊行されることなく、近代の詩論研究においても、元は最も見るべきもののない時代とされ、とりわけ詩法書の類が論じられることは殆どないまま現在に至っている。

この状態に大きな変化を起こしたのが、『二十四詩品』偽書論争である。『二十四詩品』は晩唐の詩人司空図の作とされ、後世の詩論に大きな影響を及ぼした重要な著作とされてきた。しかし、1994年陳尚君と汪湧豪は、この書は明の懷悦の作であるとの説を発表し、大きな論争を巻き起こした。続いて95年張健が元の詩人虞集の作であるとの説を提起したが、彼らはいずれも『二十四詩品』が元代詩法書の一つ『詩家一指』に含まれていることをもとに論を展開していたため、元代詩法書とその刊本が注目を集めるところとなった。

筆者は、中国の大学で哲学を専攻し、卒業後大学の講師になってからは、哲学及び美学の講義を担当した。その後機会を得て1987年日本に留学、東京大学大学院人文科学研究科美学芸術学専攻修士課程に入学し、「司空図の『二十四詩品』注解及びその方法論的特徴」という主題で論文を提出し、修士学位を与えられた。そして、引き続きこの主題について研究するために、同大学院人文社会系研究科 アジア文化研究専攻 中国語中国文学専門分野 修士課程に進学した。

1996年、東京大学に客員教授として赴任していた北京大学中文系葛音暁教授の御教示を受け、筆者は初めて『二十四詩品』偽書論争について知った。この書が司空図のものでないならば、筆者の研究は根底から検討を迫られる。筆者は日本の図書館で、『二十四詩品』を含む書物の調査を開始した。筆者の元代詩法叢書の研究はこうして始まった。

その後『二十四詩品』問題については論争が重ねられ、この書は崇禎年間に『詩家一指』

の中から分離し、単独の書物として現れたという点では、ほぼ見解の一致を得たものの、その作者が誰かについては（司空図説も含め）未だ決着を見ていない。むしろ『二十四詩品』偽書説が提起された意義は限りなく大きい、それは単にこの書の真偽に止まらず、元代詩法書という忘れられた著作を発掘し、その研究を通して、中国詩論史の再検討を促すという点に、より大きな意義があるといえよう。中国詩論史の最重要著作の一つ『二十四詩品』は、その前歴にはまだ議論の余地があるとはいえ、最も価値のないものとされてきた元代詩法書の中から出現したものだ。元代詩法書の中には、まだ多くの興味深い問題が眠っており、それを掘り起こすことによって、中国詩論史の書き換えはさらに続いていくであろう。本論はその端初を開くものとなりたいたいというのが筆者の希望である。

この領域では、一つの刊本の発見が研究を大きく進展させるという状況が続いた。本論に収録する拙論の位置づけを明らかにするために、時の経過をおって、刊本の発見とそれによって明らかにされた問題を概観しよう。

- ①1994年11月陳尚君、汪涌豪「司空図『二十四詩品』辨偽」（唐代文学学会第七次年会と国際討論会口頭発表、『中国古籍研究』1996年第1期に掲載）

いくつかの書目に基づき、懷悦著者説を主張。元代詩法書そのものは未だ調査されていない。元代詩法書が中国文学の専門家にとってもなじみのないものであったことが分かる。

- ②1995年9月張健「『詩家一指』的產生時代与作者問題——兼論『二十四詩品』作者問題」（『北京大学学報』社会科学版）

趙摛謙『学范』と楊成『詩法』（1480年刊）に基づき、懷悦説を否定。史潜校刊『新編名賢詩法』を発見し、その中の『虞侍書詩法』に基づき、『二十四詩品』の著者は虞集であると主張する。

- ③1997年7月張健「從懷悦編集本看『詩家一指』的版本流傳及纂改」（『中国詩学』第五輯）

名古屋蓬左文庫蔵朝鮮本『詩家一指』の発見。『詩家一指』が元末にはすでに流伝していたことを明らかにし、虞集著者説を堅持。

- ④1998年3月筆者「『二十四品』の著者と成書年代に関する考察——朝鮮本『詩家一指』と『木天禁語』に基づいて」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』創刊号）

日本国会図書館蔵朝鮮本『木天禁語』、同『詩家一指』発見。両書に基づき懷悦説の否定を補強し、虞集説に対する疑問を提出。『二十四詩品』の著作年代は元代以前ではないかと推定した。③の張健論文を入手したのが、刊行の直前だったため、朝鮮本『詩家一指』及びそれに基づく発見は筆者のものとしたが、本論では主張を同じくする部分は張健の説と改めた。

- ⑤1998年12月筆者「對『二十四品』懷悦説、虞集説的再考察——根据朝鮮本『詩家一指』『木天禁語』及日本江戸版『詩法源流』」（『唐研究』第4期、北京大学出版社）

国立公文書館蔵朝鮮本『詩法源流』、国会図書館蔵江戸本『詩法源流』発見。④の二書に新発見の二書を加え、史潜『新編名賢詩法』が全面的に改竄された劣本であると主張。虞集説に対する反論を補強した。

- ⑥1999年10月筆者「『詩法源流』偽書説新考——五山版『詩法源流』と朝鮮本『木天禁語』に基づく考察」（『日本中国学会報』第五十一集）

大阪杏雨書屋蔵五山版『詩法源流』（1359年刊）発見。現存する元代詩法叢書の中

では最古のもので、刊行年代が元であることから、元刊本に基づることが確認できる唯一の書である。『詩法源流』諸刊本のうち本書のみに収録される「武夷山人跋」を検討した結果、本書は元代の文人杜本が詩法の普及を目的として刊行したものであることが明らかになった。元代詩法書は書商が営利のために、著名詩人の名を詐称して刊行した偽書であるとする清代以来の定説に大きな疑問を提出した。

⑦2001年9月張健『元代詩法校考』（北京大学出版社）

筆者の論文に対する言及はないが、五山版『詩法源流』、朝鮮本『木天禁語』など筆者が発見した諸刊本に対する検討が行われた。筆者とは異なる見解が主張されている。

本論は既発表の論考に、張氏の説に対する検討と新たに発見した事項を加え、次のように構成する。

第一編 刊本の紹介

『二十四詩品』論争をきっかけに再発見された元代詩法叢書の中から、主要なもの七種を選び、基本的な事項を整理する。

第二編 『詩法源流』偽書説新考——五山版『詩法源流』と朝鮮本『木天禁語』に基づく考察

五山版『詩法源流』は元代詩法書の真の姿を理解するために、最も重要な資料であり、以後の議論を助けるためにも先ず冒頭で検討を加える。

第三編 『二十四品』の著者と成書年代に関する考察——朝鮮本『詩家一指』、朝鮮本『木天禁語』、五山版『詩法源流』に基づいて

これまでに発見された元代詩法叢書の諸著によって、『二十四品』問題にはどのような結論が導けるかを示す。

第四編 『杜陵詩律五十一格』とその成書年代——杜詩研究の起源を探る試み

朝鮮本『木天禁語』にのみ収録される『杜陵詩律五十一格』に基づき、その特徴及び著作年代を検討し、杜詩注解の歴史に対する新たな説を提起する。この篇は元代詩法叢書の研究がもつ大きな可能性を示すものとなるであろう。

論文初出一覧

- ①、『二十四品』の著者と成書年代に関する考察——朝鮮本『詩家一指』と『木天禁語』に基づいて（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』創刊号、1998年4月、1～34頁）
- ②「『二十四詩』の著者と成書年代に関する考察——朝鮮本『詩家一指』『木天禁語』『詩法源流』に基づいて」（東京大学大学院中国語中国文学専修課程修士学位取得論文）
- ③、對『二十四品』懷悅説、虞集説的再考察——根据朝鮮本『詩家一指』『木天禁語』及日本江戸版『詩法源流』（『唐研究』第4期、北京大学出版社、1998年12月、99～136頁）
- ④、『詩法源流』偽書説新考——五山版『詩法源流』と朝鮮本『木天禁語』に基づく考察（『日本中国学会報』第五十一集、1999年10月、107～123頁）
- ⑤、『詩法源流』偽書説新考——根拠五山版『詩法源流』和朝鮮本『木天禁語』（『文史』2000年第二集、総第五十一集、中華書局、2000年12月、217～235頁）
- ⑥、『杜陵詩律五十一格』とその成書年代——杜詩研究の起源を探る試み（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第5号、2002年4月、1～45頁）

⑦、『杜陵詩律五十一格』及其成書年代——關於杜詩研究起源的考察（『人文中国』第十期、香港浸会大学人文中国学报編輯委員会、上海古籍出版社 2004 年 5 月，269～300 頁）

¹ 文淵閣『四庫全書』（電子版、上海人民出版社・迪志文化出版有限公司、1999 年？〈東京大学 OPAC のママ〉。以下『四庫全書』本と略称する）の唐の陸龜蒙撰『甫里集』卷十六、「叢書者、叢脞之書也。叢脞猶細碎也、細而不遺大、可知其所容矣。…歌・詩・頌・賦・銘・記・傳・序、往往雜發、不類不次、混而載之、得稱為『叢書』。」

² 『詩源辯體』（人民文学出版社、1987 年 10 月）卷三十五、339～345 頁参照。